

ハーフムーン

藤原迅×一ノ瀬加津

成人向け

著者 ささくれ

なんとなく眠れなくて夜中なのを承知で探ったアプリの中、よく考えればリダイヤルですぐに繋がるのにわざわざ確認したくてその名前を反芻する。

頭の中で何度も繰り返して、それから電話をかけた。

「……なんだ、寝てなかったか」

コール音は短くて反応は早い。

こんな時間に電話してくるとは良い度胸だと言われるのかと思いきや返ってきた言葉は素直だった。

出てくれたとしてもすぐに切られると思っていたがゆえに喜びは大きかった。

「ん？ ああ、なんか眠れなくて。おまえも？」

スマホの向こうから聞こえる声は確かに睡眠を途中で妨げられたにしてはしっかりしていた。

互いに寝つけない同士だったとわかれば車の鍵を探して上着を取り寄せていた。

「今からそっちに行く。俺が行った方が何かと都合がいいだろ」

互いのスケジュールは把握している。

真夜中であることを知ったうえで通知を送った男、
藤原迅（ふじわらじん）は、6人組男性グループ
「chronoX（クロノクス）」のメンバーのひとりで圧倒

的なカリスマ性を持つ。

通話の相手は同じく chronoX のメンバーでファンの間でも最強のシンメと認知されている一ノ瀬加津（いちのせかつ）。

ビジネス上のカップルであり、プライベートでもその仲は深い。

声だけでの反応だけではわかりづらいものがあつたが来るなどと言わないところを思えば快諾の証。

巡ってくる季節の変わり目に油断していたわけではなかったが、外に足を踏み出して震えが走った。

自覚はなくても薄着だった。

くしゃみが何度か小さく出て鼻が痒くなった。

「風邪じゃねえって。ちげえよ、ちょっと寒かった
だけだ。あ？ 来るなって？ 俺は行くからな、待
ってろ」

藤原の視線が鋭くなる。

車に乗り込む寸前まで切らなかった電話は声だけで
も聞いていたいという初々しいものじゃなく、単に
相手を支配していたかったからだ。

互いに同じ気持ちだと思えば一秒でも早くその肌に
触れ、押し倒して――。

さっきの電話の中で暗に行為に及びたいと伝えている。
る。

通話を切った後にでも興奮していてくれればいい。

暗闇の中、藤原は笑った。

車は静かにエンジンを響かせながら目的地まで最善の走りを見せた。

幸いにして真夜中の道路は混むことはなかった。

車から降りれば少々厚手の上着が冷え込んだ空気から藤原の体温を守ってくれた。

時間帯を考慮して鍵のかかっていないドアをそっと開ければ珍しく出迎えがあった。

「思ったより遅かったな」

アイドルらしからぬ素の顔を見せる一ノ瀬はラフなジャージ姿。

藤原の姿を確認するとスマホ画面に視線を落とした。

「けっこう道は空いてたし、ちょっと飛ばしてきた——なに、待てなかったわけ？」

「なんつか……おまえにしては遅いんじゃないかって……まあいいや。何か飲む？」

部屋に上がり上着を脱いで、律儀にも客人として扱ってくれることにやんわりと藤原は首を振った。

部屋の隅にある照明だけが灯っていて、やわらかな印象が強かった。

やっと味わえた安堵感に藤原は笑み、一ノ瀬もまたやわらかく表情を変えていた。

「寂しかった？」

「んなわけねーだろ」

グループとして一緒に仕事を終えてから、まだ一日と経っていない。

「この部屋、寒くねえ？」

上着を脱いだすぐに二の腕辺りを無自覚にもさすっていた。

気づけば藤原の鼻がむずむずしている。

体感温度の問題なら、うかうかしてられない。

「おまえが来る前まで窓あけてた」

「は？ さみいだろ。なんであけてんだよ」

「眠れなかったんだよ、全然」

疲れが溜まっているだろうに一向に訪れない眠りの兆候。

テレビをつけてもショッピング番組か放送休止の狭いジャンルしか映らず、インターネットアプリの類も何も面白くなかった。

横になろうが気分は落ち着かず、窓をあけ外の冷たい空気を取り入れて少しした頃に藤原から電話があった。

その電話の最中に、鼻をむずむずさせる音が聞こえたため、冷たい空気を取り込むことをやめたのだが、予想以上に部屋の中は寒くなっていたらしい。

「怖い病気とか流行りだしてんだから気をつけろよ」

「薄着のおまえに言われたくねえっての」

言いながら、一ノ瀬はぴたりとソファに座った藤原に寄り添う。

暖を取るなら体温が一番だということを知っている。

薄着だと余計に体温の伝達が早い。

「ひとのことも言えねえじゃん。おまえも薄着だろ」

「俺はいいんだよ、外に出るわけじゃないから」

「よくねえだろ。窓あけてたんだから冷えんだろ？」

窓を閉めたといっても部屋の中はひやりとしたまま。

暖房器具を使用するほど酷寒ではないが肌寒くはあ

り厄介だった。

そのことについても考える必要はあったが、藤原にはそれと同じように疑問を持つことがあった。

「……さっきから甘い匂いする。何か食ってた？」

香水の類ではない甘い匂いがどこからか漂う。

夕飯は済ませてあり、キッチンはきれいに片づいている。

甘い匂いのもとはどこにあるのかわからない。

周囲を見渡してみても、それらしい手がかりは掴めなかった。

「やっぱ、おまえ風邪ひいてんじゃねえの？」

「は？」

「ずっとアメ食ってるから。俺」

見ろよと言わんばかりに、べえっと舌の上にのせたアメ玉を口の中から出した一ノ瀬に藤原は動きを止めた。

隙間なく密着したソファの重みが集中した。

一ノ瀬の口の中から出てきたアメ玉はたっぷりと唾液にコーティングされ、てらてらとなめらかな光沢を放っていた。

ピンク色の舌の上にのっていることもあり、藤原の思考は艶やかな色に完全に染められてしまった。

それが一ノ瀬の策略だったかはわからないが、藤原の反応を楽しんでいたところを見ると満更でもない

様子だった。

「こんなに近くでアメ食ってんのにわかんねえって、
風邪ひいてんだよ。鼻がおかしくなってる証拠だろ。
どーせ暑いからって風呂あがりに裸だったんじゃない
えの」

「ばっ……まあ……」

「ほら身に覚えあんじゃん。だったら帰って薬飲んで
無理やり寝てろ」

「眠れねーから来たんだろ」

「薬飲めば眠くなんだろうが。早く帰れ、病人」

「あ？　ちょっと冷えたただけだって。風邪じゃねー
し。つか、アメ食ってる方が悪いんだろ、バカ」

「なんでだよ、俺の勝手だろうが」

一ノ瀬は口の中をアメ玉でもごもごさせて、藤原を挑発するようにぶいっとそっぽを向き詰めていた距離を広げた。

そんな一ノ瀬の行動に大人になることを忘れ、藤原はまんまと苛立ちに火をつけてしまった。

呼ばれたわけではないがこうして車を飛ばしてきた相手に向かってケンカ腰の構えを見せつけられるのは（ただでさえ、イライラしてるつつうのに）と腹立たしく思えた。

藤原をソファの中心付近に置き去りにして極端に左端へと移動した一ノ瀬を追い、藤原はその腕を引き、一ノ瀬の体勢を崩すことに成功した。

「おま……危ないだろ、俺はアメ食ってて……！？」

「だから支えてやってんだろーが」

中途半端にソファに横にした一ノ瀬の上半身を、その背中に腕を回すことで支えた藤原はにいったり顔。

誤って一ノ瀬がアメ玉を飲み込まないように考えていた。

だからといって一ノ瀬が礼を言うことなどなく、むしろ大きく一ノ瀬の怒りを藤原は買った。

一ノ瀬の上に跨る藤原は上唇を舐め、言った。

「やる」

「え……は！？ おい……」

堂々と自分の上に跨ってくる藤原には慣れているはずなのに下から見上げる姿勢になると、ほのかな灯りでも影はでき魅力的に見える。

一ノ瀬の体の中にある大事な感覚器官は爆発を抑えきれない。

脈拍に異常を感じてしまうほど気が気でなかった。

ぎゅっと握る拳に汗が滲んで滑る感覚すら覚えてしまう。

強気な態度に出てしまったが、藤原の手のひらがわずかに動いただけで一ノ瀬の呼吸に変動が表れる。

「煽られちゃしょうがねーんだけど？」

「人のせいみたいに言ってんじゃねえよ。迅のくせ

に」

「うるさい。黙ってろ」

「えらそーなこと言ってんじゃ、ね……っん!？」

下半身はがっちりホールドされ上半身だって藤原の腕に頼る始末。

どう考えても甘い雰囲気ではないのだから大人しく
できるわけもなく喚くように眉を寄せる一ノ瀬に強
行手段に出た藤原の速攻は見事に騒がしい唇を黙ら
せることができた。

静かにさせることが目的だったのに、それでも一ノ
瀬の悪あがきは続いた。

「ふっ……ん、 っん……!？」